



Title	住民活動と地域づくり：女性を中心に
Author(s)	下村, 朋史
Citation	社会教育研究, 20, 135-146
Issue Date	2002-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/28546
Type	bulletin (article)
File Information	20_P135-146.pdf



[Instructions for use](#)

住民活動と地域づくり ～女性を中心に～

下 村 朋 史

はじめに

バブル崩壊後の不景気を回復させる術もなく日本社会は新世紀を迎えた。2002年を迎えた現在でも経済不況は回復する兆しもなく、失業率は日々低下している現状である。その一方、これまで地域の発展に関して受身的であった市民が主体的となって、生き生きとした実践を通じて地域づくりに貢献し、内発的な発展をもたらしている事例も少なくない。そうした市民の中には民間非営利組織（NPO）と呼ばれる新しい協同組織として、行政、あるいは企業と協働で地域課題へ取り組む事例も出てきている。

しかし実際の地域では、行政が主体とならなくてはいけないような危機的な状況も存在している。そうした状況の中でも地域住民が主体となって関わることのできる契機はあるだろうし、むしろ住民が関わっていくことで、新たな可能性が生まれてくると考える。

本研究では、北海道紋別郡西興部村の住民団体「村づくりを考える会」の活動を対象とする。その活動の中で特に男性と女性との意識の違いや、女性が地域に果たす役割や意義を、平成13年8月に行った聞き取り・アンケートの結果をもとに考察し、今後の地域づくりの主体としての可能性を考察することを目的とする。

1 西興部村の概要

西興部村は北海道のオホーツク海に面した総人口1324人という小さな村である。日本の高度経済成長期であった1960年代以降人口は減少し、それとともに地域産業、商業、農業の衰退が起り、現在もそれらの衰退は非常に緊迫した状況である。

それらの改善策として、村では「福祉の村づくり」を掲げ、村に福祉施設を建設し、平成7年度の国勢調査から平成12年度の同調査では、人口5.7%の増加となった。それは福祉施設の建設が新たな雇用を生み出し、職員、施設利用者の村外からの転入が原因だと考えられる。人口増という点から見れば、行政施策の果たした役割は非常に大きな意味を持っている。

2 「村づくりを考える会」

「村づくりを考える会」(以下「考える会」)は、平成6年より始まった村の人づくり事業である「ニューカントリーフライト事業」(以下「フライト事業」)をきっかけとしてつくられた団体である。現在「考える会」では、花を中心とした活動を展開している。

今回は「考える会」事務局(役場企画課)をお願いをして、「考える会」会員4名を紹介していただいた。そしてその方々からの聞き取りを中心に「考える会」の活動と女性との関係について考察していきたいと思う。主な質問は、「フライト事業」参加経緯、「フライト事業」参加後の自身の変化、「考える会」についての評価、今後の活動について等についてお聞きした。聞き取りの主要な点をまとめたものが表1である。

また、聞き取りを行った方4名も含め、「考える会」会員全員にアンケートを配布した。質問項目については聞き取りとほぼ同様のことを尋ね、主に男女の考え方の違いについてより明確にするために行った。回収率は61%(配布数61,回収数37)、分析対象者は男性18名(回収率64%)、女性19名(回収率58%)であった。

2-1 「考える会」の女性

西興部村には女性が主たる担い手となっている住民団体がいくつかのものがある。PTA、商工会婦人部などは女性が中心となっている団体である。PTAは西興部にある小中学校に通う子供を持つ母親が中心となっており、最近では意見をしっかりと言う人が多くなってきているという。商工会婦人部は、村の商業の衰退と同様に、その担い手不足は否めない。その中で、村のお祭りや他のイベント等の手伝いには積極的に参加している。

「考える会」の担い手である女性がどのような人達かということ、50代の女性の数が多いということ、2人世帯が多いということ。そして主婦層が多く、居住年数が30年~40年というものが多いということがあげられる。「考える会」の女性は、結婚を期に西興部村に移り住んだ50代の女性が多く、子育てを離れた主婦層が主な担い手だと考えられる。

2-2 ニューカントリーフライト事業とその成果

「フライト事業」の始まりは、平成3年度から始まった村の人づくり・地域づくり事業になる。竹下登当時総理の時代に行われた「ふるさと創生」事業に当てられた1億円の事業費を、茶室、図書費などの建設費にあてた他、あまったものを基金として村の人づくり・地域づくり事業に使うこと決めた。

人づくり・地域づくり事業が始まった当初は、村民が研修内容を計画して国内に視察研修を行い、役場はその研修費に補助金を出すという形で始まっていった。その流れを踏んで、平成6年度

表1 聞き取り内容

	A氏(女性)	B氏(男性)	C氏(女性)	D氏(男性)
「フライト事業」参加動機	知り合いからの誘いもあり、特別な動機はなかった。	特別な目的意識は持っていなかった。単純に海外に行ってみたかった。	前年度事業参加者からの誘いがあったため。こうした機会がないとなかなか海外には行けないと思ったので。	役場から要請(参加者の不足)を受けたため
海外の印象・自身の変化	海外の花づくりは印象的だった。もう一度海外に行くことができればもっと違う見方ができると思う	自然や環境に配慮した街並み、制度などが印象的。事業に参加してから本格的に花づくりにこだわってきた。	木や花でつくられた街並みが印象的。海外で見た花は北海道でも栽培できるものだとわかり、自分にも海外で見た綺麗な庭ができることがわかった。海外に行ってからには人目を気にせず花づくりができるようになった。	街並みが整備されていること、環境に関する整備が徹底して行なわれていることが印象的。花も印象に残った。他の町に出かけていっても、道路に生えている雑草等が気になるようになった。自分でも花を育てるようになった。
「考える会」について	花づくりによって街並みは随分変わった。(良くなった。)村の人も積極的に花づくりをしているように思う。	特別花で村が変わったとは思わないが、将来的に海外で見えてきたような街並みができればと思っている。	フライト事業は参加者が集まらないため、結局寄せ集めのような形になっているので、全員が花に興味を持っているとは限らないだろう。イベントに参加するようになって、村の人との交流機会が増えた。	自分が綺麗だと思った海外の街並みが、村の中で実際に行なわれているのは良い事だと思える。会主催の花づくり講演会に参加して、今まで全く知らない分野のことをいろいろ学んだ。
「考える会」活動頻度	仕事の都合上ほとんど参加していない	仕事の都合上ほとんど参加していないが、時間に余裕のあるときはできるだけ参加している。	だいたいイベントや事業には参加するようにしている。	ほぼ全ての活動に関わっている。
「考える会」の活動についての考え				仕事上イベント等にはなかなか参加できない。イベントの日程等がいつ決められているのかがわからない。

からは研修先を海外にして、その事業名を「ニューカントリーフライト事業」として現在まで行われている。

「フライト事業」は、村民20名を定員として、ヨーロッパの国々を視察研修する形で行われている。平成13年度現在まで、過去5回行われている。(うち平成10年、平成11年度、平成13年度は中止されている。)

平成12年度に行われた事業では、視察テーマを「住民参加による街並みづくりと農山村の暮らし」とし、具体的には①自主的な花づくりや環境に配慮した街並みづくり、②ファームスティによる農山村の暮らし、③老人福祉施設、産業施設、ごみのリサイクル施設の視察を行った。旅行期間は10日間。参加者は村民10名、役場随行者3名の計13名で、オランダ・ベルギー・フランスへ視察に行っている。

今回聞き取りを行った4名いずれも初めての海外旅行であって、目的を持って事業に参加したというよりは、人から誘いを受けて参加したという人がB氏を除いて全ての人に共通していた。(表1参照)他の会員も、単純に海外に行きたかったり、人に誘われたりという理由がほとんどで、それほど目的意識を持って「フライト事業」に参加しているわけではない。(表2参照)

しかし、参加当初は目的意識がほとんどなくても、実際に海外に行ってみると、様々な印象を受けていることがわかる。聞き取りでは特に海外の自然環境に配慮した街並みや、仕組みなどが印象に残っており、それが現在の「考える会」における活動である花づくりに結びついていると考えられる。B氏とD氏は、「フライト事業」参加以前はそれほど花づくりに興味はなかったが、海外の街

表2 フライト事業参加動機

【男性】	回答数	(%)
海外に行きたかった	7	39%
友達(知り合い)に誘われた	3	17%
自身の生活に役立つと思ったから	2	11%
海外の農村の現状に興味があったから	1	6%
その他	5	28%
計	18	100%

その他～引率4名
日本と違った習慣、風土、価値観が感じ取れるから

【女性】	回答数	(%)
海外に行きたかった	6	32%
友達(知り合い)に誘われた	6	32%
自身の生活に役立つと思ったから	3	16%
海外の農村の現状に興味があったから	4	21%
その他	0	0%
計	19	100%

並みや、海外の花づくりの印象が残り、参加後は自身で花の栽培等を行っている。

また特にC氏については注目すべき点があった。C氏は以前から花を栽培していたが、「フライト事業」参加以前はそれほど積極的に行ってはいなかった。その理由は、「フライト事業」が始まる前は、村で積極的に花づくりを行なう人は少なく、花の栽培を行なうことは村の中では目立つことで、C氏は周囲の目が気になっていたために、花の栽培等を自粛していた。しかし「フライト事業」が行われ、花づくりが徐々に村に浸透していったことで、積極的に花を栽培することができるようになった。またそれに伴って、花を通じて近所の人や仲間との交流が増えていった。

村の中には独特の人間関係があり、他人と異なることをすることを避ける傾向がある。そうした人間関係は、互いに力を合わせて何かを成し遂げようという意識を持つことが容易に持てるという積極的な面もあるが、その一方新しいことを独自に進めていこうという先駆的な発想に乏しいという消極的な面もある。特に主婦である女性にとっては、目立つことをすることが夫の人間関係まで影響する恐れがあるという意識があり、なるべく人に気付かれないようにしようという傾向がある。しかしC氏のように、「フライト事業」をきっかけとして、自身の興味と他者の興味が「花」を通じて一致した場合には、これまでの考えが変化し、新たな人間関係へと発展している。そうした女

表3-1 海外研修が村を見直すきっかけとなったか

男 性	回答数	(%)
は い	15	83%
い い え	3	17%
計	18	100%

女 性	回答数	(%)
は い	17	89%
い い え	2	11%
計	19	100%

性はC氏以外にもたくさんいると考えられる。

「フライト事業」は海外(ヨーロッパ)の自然や環境を間近に見ることで、その美しさや素晴らしいさを実感する機会となっている。そしてその美しい、素晴らしいと感じた街並みを、西興部村でも再現しようというひとつのきっかけづくりとして大きな効果があったと考えられる。

他の会員にとっても、「フライト事業」は村を見直すきっかけとなっていることがわかる(表3-1, 3-2参照)。

表3-2 見直した点

【男性】	回答数	(%)
自身の生活	1	7%
西興部村の街並み	9	60%
西興部村の農業	2	13%
西興部村の商業	0	0%
西興部村の福祉	1	7%
西興部村の学校	0	0%
西興部村の産業	0	0%
パソコン等の情報化	0	0%
その他	2	13%
計	15	100%

その他～村当局の先進性
ゴミ処理

【女性】	回答数	(%)
自身の生活	6	35%
西興部村の街並み	5	29%
西興部村の農業	2	12%
西興部村の商業	0	0%
西興部村の福祉	1	6%
西興部村の学校	0	0%
西興部村の産業	1	6%
パソコン等の情報化	0	0%
その他	2	12%
計	17	100%

その他～身近に花を楽しむこと
西興部の人間性の小ささ、狭さ

また、何を見直したかという点についてみると、男女では多少異なる結果が得られた。男性は「西興部村の街並み」を見直したという人がほとんどであるのに対し、女性は「自身の生活」を見直した人が割合では一番高い。「自身の生活」の何をどのように見直したのかというところまでは今回の調査では明らかにできなかったが、海外の異文化に触れたということで、これまでの自分自身の生き方を見直した女性が多かったのではないかと思われる。

2-3 「考える会」の活動と現状評価

「考える会」発足から現在まで、中心的に行われてきている活動は花を中心とした活動である。具体的には会員が花を自宅に栽培し、ガーデニングを行ったり、村の公共施設に花を植えたり、国道の歩道に花壇を備えたりしている。主な活動は以下の通りである。

これらの活動の他、自宅で育てた花を道の駅「花夢」で販売する「花好夢」(かこうむ)というグループが「考える会」から生まれ、活動をしている。

①国道景観事業「我が村は美しく」事業参加

「我が村は美しく」事業は平成8年より始められた事業で、国道沿線の環境美化に重点を置いた村全体で行われている活動である。この事業には村のほとんどの団体・個人が参加している。

②森林公園花壇づくり

森林公園にはフライト年度ごとに花壇を作っており、公園に文字通り花を添えている。

③花づくり視察事業

近隣の花づくりの盛んな街へ行き、花づくりの現状を視察見学に行く。

④花壇コンクール、講演会、講習会

「夢民」(むーみん)の花壇コンクールと名づけられ、各家庭や公共施設等につくられた花壇やガーデニングをコンテストとして様々な人達に見てもらおうコンクールを行っている。優秀な作品は表彰される。またその同時期に、外部から講師を呼び花づくりに関する講演会を行っている。

聞き取りを行った4名全員が、花による活動には肯定的な意見である。その理由としては、花によって街並みが変化してきたことが第一に挙げられる。それは、自分達が海外で見てきた美しい街並みが徐々にできつつあることを実感しているからだと考えられる。そして第二には、C氏のように花を通じた交流が盛んになってきているということが挙げられる。

その他の会員も花づくりについては肯定的な意見である。その理由として一番多いものは男女共に「花で一杯だと居心地が良い」である(表4参照)。その次に「村民が花づくりに関わっているから」が男女共に多い。しかし、「花づくりが村のシンボルだから」と答えた人は男女共にいな

かった。この結果から見れば、「花づくり」はまだ村のシンボルにまでは達していないという見方ができるが、肯定的な考え方で見ると、住民はあくまで自分の生活の向上を花に求めており、それが結果として居心地の良さにつながっている。そしてそれら生活環境を自分たちの手つくっているという自覚が少しずつ生まれてきているのではないかと考えられる。この点は今後の地域づくりの重要な点になると考える。つまり外から与えられるものではなく、自分たちの生活の質を高めることを自分たち自身の手で行っているということは、地域づくりの主体としての可能性を秘めており、この点を伸ばすことで、広がりを持った視野を身につけ、地域づくりの主体へと転化していくのではないかと考える。

現在の花を中心とした活動は、村の環境を住民自らの手で変化させ、自分達が地域づくりの主体であるという意識を持つためのきっかけとなる可能性がある。しかし現状は、その意識を持つというところまでには至ってはいないと考える。それは「考える会」のイベント全てが役場職員を中心に考えられたものであり、結局は行政主導型の活動になっているからである。役場職員もその点については自覚を持っているが、現状では役場職員が中心にならざるを得ない状況でもある。しかしイベント的なものは行政主導であるものの、日常的な花づくりは当然住民、特に女性を中心となって行われている。そうした地道な活動が、「花夢」での花の販売のような活動へと移り変わっているのも事実である。そういった点から見ると、徐々にではあるが、行政の手を少しずつ離れているような印象も受けた。

2-4 今後の「考える会」の活動

現在は花を中心に活動をしているが、それは主に「花を育てる」ことと「花を植える」ことである。花をきっかけに村づくりを考えるのがこの会の活動趣旨だが、「花を育てる」「花を植える」ということは、花に興味がないとできないことだと考える。B氏は花を中心とした活動とは別の新しい事業を行って、花に興味のない人でも参加できるようにすることを考えていきたいと考えている。しかしただ単純に花に興味のない人も参加できるように別のことをすると、これまでの活動と全くかけ離れたものになる可能性がある。花以外の展開をするというよりは、花というテーマを村全体で

表4 「花づくり」が良いことだと思う理由

【男性】	回答数	(%)	【女性】	回答数	(%)
花がいっぱいと居心地が良い	8	44%	花がいっぱいと居心地が良い	10	56%
子供の環境に良い	2	11%	子供の環境に良い	1	6%
村が活性化する	3	17%	村が活性化する	2	11%
「花づくり」が村のシンボルだから	0	0%	「花づくり」が村のシンボルだから	0	0%
村民が「花づくり」に関わっているから	5	28%	村民が「花づくり」に関わっているから	4	22%
その他	0	0%	その他	1	6%
計	18	100%	計	18	100%

その他～心が和むと思う

共有する必要性の方が先決であると考え。花づくりに興味がある人でもない人でも、西興部村の象徴は何かと聞かれたときに、「花」であると答えられるような村の「文化」をつくり上げることが必要である。

徐々に活動は広がっているが、まだ花が村の象徴としては位置付けられていない。西興部地区には道路沿いに花壇が整備されているが、上興部地区を見るとそれはなく、プランターが点々と置かれているだけである。植えられている花を見ても、西興部地区はきれいに咲いているが、上興部地区では枯れてしまっているものが目立つ。地域によっても盛り上がりには違いがあるような印象を受けた。

今後の展開（表5参照）について、男性の場合は「村民が全員花づくりをするように働きかける」と「特に今のままで良い」が最も多い数字であった。一方女性の回答では、今後はもっと様々な展開をすることを望む傾向がある。ここでは男性より女性の方が「花」を西興部村の文化にしていきたいという想いが強いのではないかと考えられる。しかし、こうした今後の展開を話すような場は現時点ではなく、今後の方向性は、結局のところ一部の人の手に委ねられてしまっている。

今後必要なことを挙げるとするならば、第一に「考える会」の会員が中心となって、今後の活動について議論を重ねることが必要である。ここには花に興味のある人、ない人、そして男性女性、各年齢層の人達が集まり、それぞれの考えを出し合うことが必要である。まずは住民同士が自主的に組織をつくり、違う立場の人達がお互いの考えを共有することが先決だと考える。多くの人が現在の活動に不満を持っていても、それを汲み取る機会がない。それを誰かに委ねるのではなく、自分達がそうした不満を解決するために行動することが必要である。

そうした上で、あらためてこれまでの活動を総括することが必要となる。例えばC氏は、自分自身で花づくりについて研究し、西興部村での花の育て方を独自に習得している。独自の方法を持っている人が花づくりの講演会を聞いたところで新たな発見や進歩はあまり見られない。今後花づくりが広まっていけば、C氏のように独自の方法を身につける人は増えると予想される。それでも花

表5 今後の活動について

【男性】	回答数	(%)	【女性】	回答数	(%)
花づくりを観光に活かす	3	18%	花づくりを観光に活かす	5	28%
花を栽培して産業に活かす	0	0%	花を栽培して産業に活かす	1	6%
村民が全員花づくりをするように働きかける	6	35%	村民が全員花づくりをするように働きかける	2	11%
福祉分野の活動をする	0	0%	福祉分野の活動をする	3	17%
木を活用した活動をする	0	0%	木を活用した活動をする	2	11%
パソコンなどを学ぶ	0	0%	パソコンなどを学ぶ	1	6%
特に今のままで良い	6	35%	特に今のままで良い	4	22%
その他	2	12%	その他	0	0%
計	17	100%	計	18	100%

その他～花以外の活動部会を設けるべき
村の今後の展望を提言するような部会の創設

づくりの講演会を続ける必要があるのかということを考えていかななくてはならない。

外部から人を呼ぶというような場合も時として有効ではあるが、花づくりが広まり、C氏のように独力で花づくりの技術を習得した人は数多くいるものとする。そういった村に住む人達が自らの技術を他者と共有することも重要な点であるとする。

また、花壇コンクールに関して言えば、これまでの開催時期というのは、花を咲かせる時期ではなく、その時期に花を咲かせるようにすることはかなりの負担になっている。しかし、時期を決めるのは役員と事務局であるがために、負担ではあっても時期を変更することはできないという。

そしてまた、本来趣味で行っている花づくりが、コンクールという形で賞金に関係するようになると、賞金のために花を育てる人も出てくるのではないかという懸念がある。結果としては、花づくりは盛んになるであろうが、本来の趣旨と外れた方向に行くのではないだろうか。そうした点に関しては、もう少し実際に花づくりを行っている人達の言葉に耳を傾ける必要があるとする。

聞き取りを行なっていく中で、多くの人から「花づくりを強制はできない」という意見を聞くことがあった。確かに強制はできないが、花づくりの楽しさを伝えること、興味の無い人に興味を持ってもらうような働きかけ、そして花に興味が無くても花に関わることが何なのかということをもう少し吟味する必要があるとする。

次に「考える会」の女性たちは、聞き取り、アンケートの結果からみて、それまでの自分の生活を「フライト事業」を通じて見直し、海外で見えてきた美しい街並みを西興部でも再現していきたいという意識を男性以上に持っていることがわかった。その多くの担い手は子育てを終え、自分たちの時間が持てるようになった主婦層であると予想ができる。そうした女性達は「考える会」にとっても、今後の村づくりにとっても重要な担い手になると考える。それは、徐々にではあるが、花が村に浸透しているひとつのきっかけをつくっているからである。直接のきっかけは「フライト事業」に代表されるように、行政側の働きかけにあるとするが、実際に行動しているのは、家庭で花を育てたり、飾ったりしている人達である。そうした人達の多くは女性であるとする。重要な担い手である女性達が、「考える会」の中ではあまり表立っている印象を受けなかった。影に潜んでいる女性を中心にしていくことで、「考える会」の新たな活動の契機になるのではないかと考える。

3 考 察

これまでの「考える会」の活動の成果と課題をまとめると、以下のようになる。

成果

- (1) 「花づくり」が個人レベルで広がっている。
- (2) 街の環境が変化した。

(3) 人間関係の発展に寄与している。

課題

- (1) 何かイベント的なことをするときには、行政の働きかけが必須。
- (2) 「花」に興味のある人のみが中心にならざるを得ない。
- (3) 「考える会」の中で話し合いをする場がない。

上記3点の成果への貢献しているのは、間違いなく女性たちの力であると考えられる。日常的に花を育てることのできるの、女性または退職者であろう。地道な作業が徐々に村に浸透し、街の環境を変えていく原動力になったことは評価すべき点である。おそらく「考える会」の中には、地道に花の育て方を学び、今や西興部村で花を育てる技術を習得している人もいると思われる。それはもはや趣味の域を越えた技術であろう。

しかしそうした技術を持った人がいるにも関わらず、イベント等では外部からガーデニングの講師を呼んでいる。C氏は、毎回そうした講演に参加しているものの、それから新たに学ぶことはほとんどないという。むしろ義理で参加しているような印象を受けた。これは課題の3番目に挙げた「話し合う場」の欠如が大きな要因であると考えられる。村の中にそれほどの技術者がいることをおそらく役場職員は知らないであろう。外部から人を呼ぶよりも、地域の人を活かすことが、地域の人々を育てることへとつながると考える。

現時点で「考える会」は、「花づくり」に興味のある・実際に「花づくり」を行っている会員（特に女性・退職者）と、それほど「花づくり」に興味のない会員と、事務局（役場職員）とがそれぞれバラバラに存在している（図1参照）。その中でイベントをする場合には、企画や運営の中心は事務局であり、会員は形式的に参加するものの、3者のつながりは非常に薄い。イベントが新たな可能性を秘めたものとは言い難い。

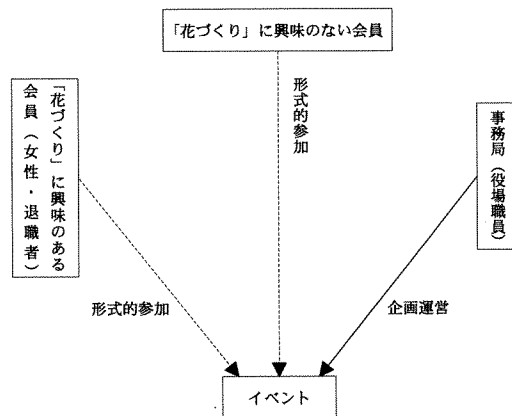


図1 「村づくりを考える会」組織内部図

こうした状況を打破するためには、第一に、組織内の3者の関係を築き上げることが必要であろう。現在の活動の評価、今後の活動の方向性について、組織内で統一した目的をつくることが第一に行なうべきである。「考える会」の女性は、現在の「花づくり」という活動以外にも、もっと広がりのある活動をしたという傾向が男性に比べて高い。そうしたエネルギーを個人の中に収めないうで、組織の中に活かしていくことが、今後の活動の重要な力となる。

このことを実現するためには、社会教育的な視点を持った人が介入することが重要な意味を持つと考える。直接のきっかけは「フライト事業」という海外での異文化体験ではあっても、「花づくり」は個人的な趣味に陥り易い。せっかくの「花づくり」を個人的満足とどまらせず、自分の力が地域づくりに役立っているという実感を持てるような働きかけや、「花づくり」に興味を持っていない人達に対する働きかけをするような、人と人、地域と人をつなぐことを意識的に行なうことのできる人が必要である。

実際村の中には、地域づくりの重要な担い手になるであろう人が数多く点在している。しかしそれらはつながっていない。社会教育的な視点からそうした人々をつなぎ、協働することで、新たな力を生み出す可能性を、西興部村は持っていると考ええる。特にその中に女性の力が加わることで、経済的な発展のみならず、新たな文化を創造するような、独自の魅力を持った地域づくりを行なうことができると考える。自分達が地道に築き上げてきた「花」という文化は、住民の誇りや自身へとつながる可能性がある。その地道な努力を無駄にしないような今後の展開に期待をする。

おわりに

西興部村のように、緊急的な課題が数多く存在する地域の中では、やはり行政がある程度の主導権を握らなくてはいけない状況であると考ええる。「福祉の村づくり」というのも、そうした課題の解決手段だったのだろう。そうした解決方法での効果というのも認められるものである。しかし、緊急的な課題解決のためとは言え、実に様々な試みを行なっているのも現実である。2001年12月には、マルチメディア館「IT夢(アトム)」が完成し、村内約650戸を光ファイバーで結ぶ「電腦村」として注目を浴びている。様々な試みを通じて、確かに村は新しい道へと進んでいると思われるが、実際の住民は果たしてどう考えているのだろう。「福祉の村」、「電腦村」と呼ばれるようになれば、村がどのような方向性を持っているのかが、客観的にはわかりにくい。そうした大きな動きの裏では、地道な努力を重ねる住民がいる。行政がつくったハコを、住民達がその地道な努力と関わらせながら利用していくと、もう少し異なる動きへと発展するのではないだろうか。

参考文献

- 「内発的発展論と日本の農山村」 保母武彦 岩波書店 1996
「内発的発展論の道」 守友祐一 農山漁村文化協会 1991
「まちづくりの発想」 田村明 岩波新書 1987
「まちづくりの実践」 田村明 岩波新書 1999
「協働のデザイン」 世古一穂 学芸出版社 2001

参考資料

2002年1月5日(土) 北海道新聞夕刊